

し、寒冷地や高標高地と考えられる。温暖地では、越夏が困難なので、多年生作物として成立しない場合もある。そのような場合に、著者は、夏を経過しない作型、すなわち、秋播きで翌年初夏から夏に収穫する作型を提案したい。この点は、今後の研究課題と考えている。

著者は、ルバーブの食味と食物繊維を含めた栄養的価値を高く評価している。本報がルバーブの普及に役立てば幸甚である。

#### 引用文献

- 1) HILLER, L.K., M. KOSSOWSKI and W.C. KELLY (1974) Factors influencing flowering of Rhubarb. Proc. Amer. Soc. Hort. Sci. 99: 125~127
- 2) 科学技術庁資源調査会 (1984) 四訂食品成分表. 192. 女子栄養大学出版部
- 3) MARSHALL, D.E. (1981) Estimates of harvested acre-

age, production and grower value of field grown and winter (hothouse) rhubarb in the United States. Unpublished USDA ARS mimeo survey of U.S. growing areas

- 4) MARSHALL, D.E. (1988) A bibliography of Rhubarb and Rheum species, US department of Agriculture
- 5) 成松次郎 (1990) ルバーブの軟化栽培における掘り取り時期、軟化温度及びジベレリン処理の影響。神奈川農総研報. 132: 1~8
- 6) 大塚洋子 (1989) ルバーブの食物繊維及びその利用に関する研究。東農大修士論文
- 7) THOMPSON, H.C. and W.C. KELLY (1957) Vegetable Crops. 204~208 McGraw-Hill.
- 8) TOMPKINS, D.R. (1965) Rhubarb rest period as influenced by chilling and gibberellin. Proc. Amer. Soc. Hort. Sci. 87: 371~379
- 9) ZANDSTRA, B.H. and D.E. MARSHALL (1982) A grower's guide to rhubarb production. American Vegetable Grower 30 (12): 6, 9~10

## 書 評

### 「土の世界」

——土からのメッセージ——

著者：「土の世界」編集グループ編

発行所：朝倉書店 1990年3月刊

〒162 東京都新宿区新小川町6-29

TEL.03-260-0141 振替東京6-8673

体裁：B5版 本文160頁

価格：定価1,854円

最近の日本人は「土地」には強い関心を示しても、「土」に対する親しみは昔にくらべてずい分うすくなっているように思える。その一方で「地球環境云々」といったいささか観念的なキャッチフレーズがマスコミをにぎわしている。このようなギャップは埋められねばならないが、ここでとりあげた書物はそれに大いに役立つのではないかと思われる。

本書は土に関心と知識をもった47人の若手研究者達のチームワークになる力作である。執筆に先立ち全国の小学生から大学生まで約5,000人にアンケート調査を行ない、それに答えるかたちで編集をしたという。類書にない意気込みでとりかかれたが、それが読む方にも伝わってくる。内容構成は7つのパートに分けられた35の項目に9つのトピックスと、コーヒープレイクと名づけられた6つの短いエッセイ風の読み物からなっている。一項目が4頁くらいなので読みやすく、また気のむいた項目をひろい読みしても、まとまった知識が得られるように工夫されている。

たとえばはじめの“土って何だろう”というわずか4頁の文を読めば、土はあったところから植木鉢の中などの別のところに移すと、性質はかわってしまうこと、つまり土は単なる“物質”でなく生きものあるいは自然そのものであり、土はその中に植物や小動物や微生物と一緒に暮らしている動的な社会であることが教えられる。終りの方の“土の生産力と地球の定員”では、土の扱い方如何で今後どれくらいの間人を養っていけるかが、具体的な数字をあげて説明してあり、土への関心がいやでもそそられる。また巻頭には土の断面（これをプロファイルという）の美しいカラー写真がいくつか掲げられているが、人の横顔（これもプロファイルである）からその人の個性や長年の経験がうかがえるように、土のプロファイルにも表面だけではわからない特徴がぎざみこまれており、土とは歴史的存在であることが感じられる。

この書物は普段われわれが気付いていない土の中からのメッセージを数多く伝えてくれている。折柄今年8月には“生命と環境を育む土”をテーマにして、第14回国際土壌科学会議が京都で開かれた。これらを契機にして日本人の関心がもっと土へむけられることが期待される。

(京都大学農学部 高橋英一)